

小さな町の大きな恐竜, アルゼンチン, ウィンクルの博物館

須藤 茂^{1), 2)}

1. はじめに

恐竜ファンの方々には大変申し訳ないのですが、世界最大の恐竜の化石に触り放題触ってきました。

もっとも、この世界では、世界最大というのは、何種類もあるのかもしれませんが、筆者は熱心な恐竜ファンではありませんので、寡聞にしてその実態はよく知りません。

本文は、博物館の紹介です。普通、紹介記事は、より多くの読者に、実際にその博物館を訪れて、見てもらうために書かれるものです。しかしながらここでは、多分大部分の読者は現地を訪れることがないものと思って、紹介するのです。

というのは、場所が場所なのです。我が国からは地球の反対側、アルゼンチンの、しかも、首都ブエノスアイレスから1000km以上山側に入った小さな町に、この博物館があるからです(第1図)。

先に述べたように、筆者は恐竜の研究をするために現地に入ったわけではありません。さらにここよりも西方にある火山の調査に行った道中で、たまたまこの博物館に立ち寄っただけなのです。一部不正確な記述があるかもしれません。御容赦下さい。

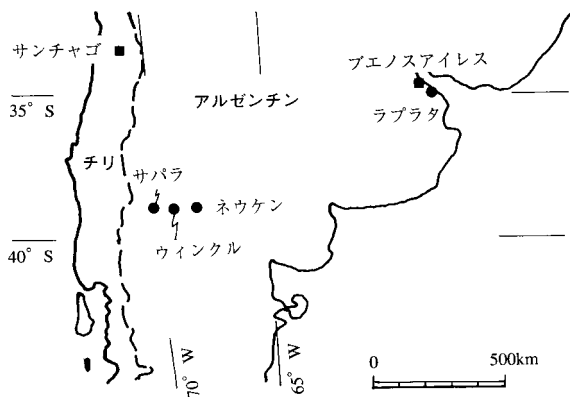
2. 周囲の状況と雰囲気

現地調査に先立ち、本務の火山に関する情報はできるだけ集めました。それより下にある中生代の地層や化石の話など全く念頭にありませんでした。

筆者はブエノスアイレスから飛行機でネウケン(Neuquen)州の州都ネウケン市に行き、そこから、

アルゼンチンの地質調査所に相当するSEGEMAR (Servicio Geologico Minero Argentino)の職員と、さらに北西方のチリとの国境にある火山の調査に向かいました。途中は大平原です。見渡すかぎりの荒れた草原です。でも、道路沿いには鉄線の柵が張られています。土地所有の象徴です。かつて、この地方を気ままに動物を飼い連れて動きまわっていたパンパ草原のカウボーイ、ガウチョは、大土地所有者が作った柵により勝手に移動することを阻止され、一時代が終わった経緯があります。しかし今ここでは、別な理由により、土地が所有されています。ネウケンから西方に向かい、遠くに山が望めるようになると、やがてポンプが見えてきました。掘削のやぐらも建っています(第2図)。ここはアルゼンチン屈指の石油・天然ガス地帯なのです。

後で、この西方のサパラ(Zapala)市にある州の地質調査所に立ち寄り、地質図などの資料の提供を受けました。それによれば、石油・天然ガスは、



第1図 位置図。

1) 産総研 地球科学情報研究部門
2) 現在: 評価部

キーワード: アルゼンチン, ウィンクル, *Argentinosaurus huinculensis*, アルゼンチンザウルス, 世界最大の恐竜, パタゴニア, 竜盤目・竜脚目, ティタノサウルス科, 後期白亜紀



第2図 石油・天然ガス地域で作業中のやぐら。ウィンクル市東方の国道22号線沿い。



第3図 博物館玄関前。左から2人目がRodolfo Coria 所長。

1000-3000m深の中生代ジュラ紀の地層から得られているようです。大平原ですから、地表地質による調査には限界があるでしょう。ネウケン市の郊外には、米国の探査会社の資材置き場がありました。

地下資源の豊かな国が、すなわち豊かな国、とは限らないのが現実です。石油は自給できるにも関わらず、今、アルゼンチンの国家の経済は壊滅の状態にあります。経済政策の失態の結果を、近未来の日本の姿とダブらせてみる解説をテレビや新聞でよくみかけます。中南米の多くの国は、まずスペインに侵略され、鉱山では多くの労働者が死ぬまで働かされるなどひどい目に遭った揚げ句、資源は収奪されました。スペインがイギリスとの戦争に負けると、今度はイギリスが支配者になりました。そして今は米国が、といった具合になっています。

この地域の石油・天然ガスの開発も、当初はアルゼンチンの地質調査所が探査を行いました。ネウケン市の西方約100kmに位置するウィンクル(Plaza Huincul)市の国道22号線沿いには、最初の試掘を記念するやぐらが建っています。そのやぐらの側には恐竜の像や看板がたくさんあります。ウィンクル市は、地下資源と恐竜の町なのです。

3. 博物館の概要

博物館は、大通りに面しています(第3図)。きれいな建物です。ここには昔から博物館がありました。この建物ができたのは、1995年だそうです。博物館の名前はCarmen Funes Museumということです。女性の名前が冠せられているようです。残

念ながら詳しい話は知りません。

研究者は、古生物学者である所長Rodolfo Coria氏、地質研究者1人、恐竜の脳の研究をしているAriana Paulinaさんの3人です。このほか、絵、イラスト、造形等の作業に携わる3人、さらに事務系の人たちが働いています。

この博物館は人口11,000人の市に属しています。町の規模に対して博物館は立派であると思いました。年間の入場者数は約25,000人とのことでした。観光客が立ち寄っていくほか、熱心な恐竜ファンが訪れるそうです。田舎町という立地条件はあまりよくありません。つくば市の産業技術総合研究所の地質標本館も大都会からは離れているので、入館者が少ないという共通の悩みがあります。そのことを所長に話したら、茨城のミュージアム、ということで、茨城県自然博物館の名前が出てきました。恐竜ファンなら御存知でしょうが、この博物館では、1997年にアルゼンチンの恐竜の企画展示を行っています。筆者は恐竜にあまり関心がなかったため、その展示を見に行きませんでした。後日、訪れたときには、その企画展のパンフレットも売り切れでした。アルゼンチン、特に中南部のパタゴニアは有名な恐竜化石の産地の1つなのです。

ネウケンとウィンクルの間の南に湖水面積816km²のアルゼンチン最大のダムがあります。そのたもとの町El Choconも恐竜の産地であり、博物館があります。発掘状況の展示や恐竜の足跡が売り物のようです。それに比べると、ウィンクルの博物館は地味ですが、目玉はあります。工事のため休館中でしたが、館内を見させていただきました。



第4図 館内を案内してくれたAriana Paulinaさん。

4. 恐竜の化石展示

第3図の写真の建物は、さらにその左の方へ、道路沿いにずっと長い塀が続いているのです。入館前には、その中庭にも展示物があるのかと思ってしまいましたが、将来の増築のためにとっておいてあるスペースなのだそうです。

ですから、現在の博物館はそれほど大きなものではありません。入口からしばらくは、アルゼンチンの恐竜化石産地一覧、卵や小さな恐竜の展示と骨格や年代などの基礎知識の説明があります。館内を案内してくれたのは、若い女性研究者です(第4図)。あまりにも若く見えたので、いつからここに勤めているのか聞いたところ、前の年の9月に大学を卒業したばかりであるとのことでした。

第4図の巨大な肉食恐竜(すみません、名前覚えていません)の次が、世界最大の恐竜アルヘンチノサウルス(*Argentinosaurus huinculensis*)の登場です(第5図)。クリーニングが完全ではないので、骨というよりは、ただの岩塊のようにも見えてしまいます。第5図の左上の壁に骨格の絵が描いてあります。そのうちの黒く塗ってあるのが発見された部分です。発見者はDon Guillermo Heredia氏、博物館(アルゼンチン国立自然科学博物館のことと思われます)のDr. Jose Bonaparteが1989年に発掘したと説明板には書いてありました。念の



第5図 *Argentinosaurus huinculensis* の標本。



第6図 運び込んできたばかりの化石標本。

ため、帰国してから上野の国立科学博物館でデータベースをチェックしたところ、竜盤目・竜脚下目ティタノサウルス科、後期白亜紀、40m、とありました。ほかに調べると、Bonaparte, Coria両博士が1993年に新種であることを確認したとか、年代は約9500万年前、体長36.6m、高さ21.4m、体重100トン、などという情報も出ています。確か現場の博物館内の体長の説明は30mだったような。世界一危うし。しかし、まあ、その巨大さは、重量感で十分に味わえます。なお、文献Bonaparte and Coria (1993)は、スペイン語のようです。御興味のある方は、お調べ下さい。英語だと、アルゼンチノザウルスになるのでしょうか。

館内には、所狭しと未開梱の標本も置かれています(第6図)。どれもこれも重そうで、筆者のよう



第7図 館内の掘削に関する展示物。

な軟弱な者には取り扱えません。恐竜の研究者にならなくて良かったと思います。

5. その他の展示

最後の1室は郷土資料館といった趣です。かつて、この地方で使った道具や機械が並べられています。ボーリングは、現地では一時代を画する産業の象徴なのでしょう、ビット類が床に置かれていました(第7図)。第2図の玄関の右側の前庭には、採掘用のポンプも展示されています。

全部で1時間足らずの訪問でした。とてもその詳細は紹介できません。小さな窓口の売店もありました。それはまあ、それなりにといったところです。館独自の出版物は、わかりませんでした。アルゼンチンで恐竜の研究、展示では首都ブエノスアイレスの南東約50kmにあるラプラタの博物館が有名のようです。そちらは日本のガイドブックにも載っています。ブエノスアイレスの国立自然科学博物館からはアルゼンチンの恐竜に関する普及書も出版されています。

6. 終りに

帰国時の機内で、客室乗務員が配っていた雑誌の表紙に恐竜の顔がありました。筆者が手を出しかけると、彼は、キミには無理だぜ、というような顔をして、エスパニョールと言いました。スペイン語版だったのです。でも、まあ、強引にもらいました(National Geographic, 2003年3月号)。

偶然とは恐ろしいもので、その中にはArgentinosaurosの写りが載っていたのです。アトランタの博物館の標本です。悔しいことに、巨大な立派な全骨格復元標本です。本物かどうかはわかりませんが、中味を確かめるべく、後日、職場の図書室にあった英語版を見ました。む、同じ号なのに表紙が違う、中味も少し違う。それはさておき、この長さ39m(スペイン語版による。英語版では127フィート)の恐竜が生命を維持するのに必要な心臓の大きさ等についての米国の研究者の見解が書いてありました。

偶然とはもっとも恐ろしいものです。さらに同誌の頁をめくると、見覚えのある顔が。訪れた博物館の所長Rodolfo Coria氏が、何千ものチタノザウルスの卵を発見したパタゴニアの大地に立っている写真が掲載されていたのです。

それにしても、日本の航空会社の方々よ、向こうにはそんなにインテリが多いのでしょうか。それともこちらに少ないのでしょうか。国内便に乗ったときに、週刊誌やスポーツ新聞に手を出してしまう自分が恥ずかしい。

文 献

Bonaparte, J. F., y Coria, R. (1993) : Un Nuevo y Gigantesco Sauropodo Titanosaurio de la Formacion Rio Limay (Albiano-Cenomaniano) de la Provincia del Neuquen, Argentina. Ameghiniana 30 (3), 271-282.

SUTO Shigeru (2005) : Carmen Funes Museum in Plaza Huincul, Neuquen, Argentina - The biggest dinosaurs in a small museum.

<受付：2004年4月23日>